

丹波小
学校便り



夢の泉

発行日

平成 29 年 10 月 10 日

第 12 号

文責：小宮山

秋季校外学習終了



それぞれがお気に入りの動物を選び、特徴や様子を観察することができました。

5・6年生は2ヶ所の見学。忍野村の「県立富士湧水の里水族館」ではガイド解説をしてい

ただき、特別に魚のえさやり体験をしました。丹波山に似た水槽はどれか

という視点で観察もしました。また富士河口湖町の河口湖フィールドセンターでは、胎内樹型という洞窟を探検し、世界に一つだけのバードコールを作成しました。

低学年も高学年も、どちらも天気に恵まれ、とても有意義な一日を過ごすことができました。

9月29日(金)に、秋季校外学習に出かけました。

1・3学年は、東京都羽村市の「羽村動物園」へ。

他のお客さんの迷惑にならないよう、しっかりとマ

ナーを守り、必要なことは飼育員さんに質問をしていました。また、それ



秋の味覚 マイタケ収穫



6月にマイタケ組合の方々に御協力をいただき伏せ込みを行ったマイタケ。9月末に一気に成長し、10月2日(月)に収穫をしました。9月28日(木)の収穫分を入れると、ちょうど児童全員が収穫をできる量でした。大きい株は子ども達の顔くらい。子ども達も喜んで持って帰り、料理してもらったことをうれしそうに話してくれました。給食でも「かてめし(まいたけごはん)」にしてもらい、秋の味覚をおいしくいただきました。

おはなしの会

9月28日(木)、図書委員会の計画による「おはなしの会」を開きました。始めは、ことばあそびの本「こんにちワニ」を使つてのペープサート。次は、絵本「にんげんごっこ」を上手に読み聞かせ、その内容でのクイズ大会。最後は青柳徹子さんによる「メガロポリス」の本の紹介。どんどん開いていくと3.7メートルにもなるふしぎな本。

図書委員会が大活躍し、本の楽しさ、読書の魅力を充分に感じる事ができた、すてきな時間でした。





「うわー！ すごい」

歓声を上げる子供たちの手の中には40cmを超える魚体。お腹を絞られるのを、力強くはねのけようとするメスのヤマメだ。丹波川の宝であり、溪流の宝石とも讃えられるヤマメ。タオルで頭を押さえ、エラの下から尾ビレへ向かい腹を絞っていくと、キラキラと黄色く光る卵がざるの中へと飛び出していく。そして、オスの精子を同様に絞り出し、丹波の源流水の中で受精させる。

5分ほど経つと、その黄色は輝きを増し、受精膜で覆われる。



「命」の誕生である。残念ながら「命」が生まれなかった卵は白濁する。子供たちには黄色の輝きが「命の色」「命の輝き」として焼き付き、廊下に設置した発泡スチロール水槽の中に伏せられる。親のヤマメたちは、産卵とともに「死のスイッチ」が入り、その命は



800余りの受精卵へと引き継がれる。来年の3月まで、毎日子供たちが運んでくる

「氷」で水質と水温を守られ成長していく受精卵は、積算水温350℃を越えると「発眼」し、命の鼓動を観察することができる。12月に入ると卵は孵化し、稚魚はちよろちよると水槽の底に固まっている。新年を迎えると、うっすらとパーマークが現れ、餌づけ

とともに、2月頃には4～5cmまで成長する。3月、いよいよ「ヤマメ卒業式」。エサを食べ始めると、狭い閉じられた水槽での飼育は難しくなるが、昨年は約600匹余りが子供たちの手で丹波川に放流された。まさしく、自然豊かな丹波山だからこそ行える体験活動である。

「自然は 人間の苗床」という言葉がある。幼児期から自然とのふれ合いを多く持たせることで、子供のみずみずしい感受性や五感を刺激することが不可欠だということである。子供に生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー（神秘さや不思議さを感じ、その尊さに気づく感性）」を持たせ続けることの重要性を説くレイチェル・カーソン（海洋生物学者）は、「子供たちが会おう事実の一つ一つが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、様々な情緒や豊かな感受性は、この種子を育む肥沃な土壌。



子供時代は、まさにこの土壌を耕す時期である」と述べている。都合の良さのみを追い求める社会の変化に、揺れ動かされる子供たち。今、自然の豊かな恵みを楽しむ体験の必要性が叫ばれる。

今年も「ヤマメの採卵受精」の時期(10/13)が来る。命を引き継ぐヤマメたちは、昨年、丹波小の食堂で生まれ、廊下で育ってきたヤマメ。子供たちは、命を繋ぐヤマメを育てて何を感じてくれるだろうか？